1983・1

通信・おなご

・22

■ 発行・岩手県北上市青柳町二丁目6~44・小原麗子

一反歩一俵・やっぱりねえ。農業に展望のひらける時代はえんと思うけどね。これからは、とう考えんだって農業が比較的に発展してね。うーん十分にそれだけで生活が出来るなんて時代は、あとらく来ないと思うがね。

農業やってるけれども勤めに出なきゃならないとが、あるいは家を守るべき奥さん方もね。パートに出るとが、そういう風な状態だと思うのでね。

やっぱりその、若い人たちの意識も変わるのはやもう得ないでしょう。現状では、うん。まず、労働力だけでミミあのミミなんでも取れるんだったらえんけれども、その米を取るためには、何百万の、そのミミトラクターを買わなきゃならないとかね。あるいは、肥料とか農薬とか、その他の習様ね、そういうものを十分かかれて、なおかつ、それに労力もかけてゆかなきゃならない。そして得るものは、なんぼくりえあるかっていうとね。ほんとうにどどたるもんなんだよね。だから家でも去年なんがまあ、春の肥料を散らすのがうね。みんな頼んだったのス。他の人に。秋まで米出すまで。うたがらね。とてもじゃないけどね。

そうだねえ。一割ぐらいしか残らないんじゃないのかな。家でもね、あのミミ農業所得をせんぶはじき出してもらったけども、あの― 申告の時さ、ね、まあ、一町六畝作ってるんだけどもさ、農業所得は、十三万円ぐらいしかない様です。そういうこと、そういうこと、純収益ね。自分でやったのならます。他に頼んだといっても、それたって、なんにもしないわけではねえんだよ。

結構、草刈りもしてるし、あのミミ水引きもしてるしね。あるいはその除草剤の散布とかね。追肥とか、そういうのはやってるわけ。うん、それで十万円。うたがらね。考えとしては、とにかくその、ミミやっぱり先祖伝来の土地だから、荒すのもあれたし、まあ、やもうえにゃって言ってるけれともね。誰かあのミミ新作してくれる人があればね。一反歩一俵でもええがらス。その方がええってね。家のおっかあども言ってるの。

桁ちがい。この方（植木）は、収入からみたってね。忙しいことは忙しいけどもね。ほんとうに夜も昼とないようなもんだけどもね。

朝はまあ、五時過ぎれば、ハウスの商品が来るすね。いまは、日が長いがら、あの家さ入れば、八時近くス。うん。お昼なんかもやっぱりお客さん見えればね。もちろん昼寝なんかはとてもすることもないしね。たいへんだけども、まず、支出もこっちの方は多いけど、あのあれです。おかけさまで場所がいいがらね。遠くのお客さんでも物かたくさんあるとか、あるいはまげるがらどが、そういうことでね。大分遠くから、足を運んでくれます。盆栽だとか寒石だとか、一鉢だとか、むこうから、わざわざ来たっていうんもあるがらね。口こみでね。

田ぼの収入からみれば、田ぼはこっちの（植木）十分の一ぐらいしかにえ。桁が違う。売り上げそのものだけばかりを見ればね。十町歩の田ぼ作ってるんよりあるんじゃないの。二千万円ぐらいの売り上げあるがらね。なあに、田ぼなんかはあれたもの、せいぜい八十俵取ったとしても、百三十万や、四十万でしょ。十五分の一ぐらいえしかにえ。

自業自得。米は買って食うこともある。

家なんかホレ、わりとあれ、なんていうのがなあ。政府へ売り渡す限度数量示されて、あのミミうだなんか生産が低いとこだからね。うだから、ちょっと足りないくらいの時もある。その時はねえ、みんな出してしまってさ、農協から、あれだ八月頃になれば買ったりス。そういう事もある。

毎年でもないけどね。八分目に取れた時はそれさ足すし、少なく取れた時はまず、一たん売り渡してしまえ。なんとかなるんだからと。

また、軌道に乗ったかどうかわがねえけどね。まあ、自分でやろうと思ってやったのだから、仮に結果がうまくなくても、誰にもかかる（迷惑）ということもないし、自業自得みたいなもんだがらミミ。

やっぱり何百とあるでしょうね業者。卸し業者もあるがらね。いま、まあ、植木のシーズンだけど、年中通じでみればね、この鉢花とか、盆栽が約六割ミミが占めるんじゃないがな。植木が四割りか。ひょっとすると、三、いや五割くらいかもしれない。東磐井の東山町あたりからも来てるのもいるしね。一週間に一回。

いや、やっぱりね。なけなしの財布をはたいてせんぶ注ぎ込んでしまったもんだがらミミ。うだがうやっぱり、明日からの生活どうしようかなんてこともあったのさ。現実にはね。でも、思い切らねば、やっぱり出来なかったしね。ウーン、やっぱりね。後がら始めた業者の追い上げ食ったりね。いろいろあるわけね。うだからやっぱり、のるかそるか、農協から相当借金もしたしね。

（一九八〇・四・二十二／北上市飯豊町村崎野／斎藤 確（45）談）

山姥と小僧

語り手・高橋春時（80歳）和賀郡湯田町　聞き語り・武田礼子

昔、ある村のお寺に、お和尚様と小僧と居たけど。秋になって、栗あ落ちはじめると、小僧あなもかも栗拾いさ行きたえぐなって、

「お和尚様あら栗拾いに行きたえ」

「山姥にくわれてしまうんだから止めろ」

「うだて行きたえろ」

と、あんまり小僧あしえがむので、お和尚様は、お仏様を拝んで、お札を三枚書いてけたけど。

小僧あ、お札をもらって栗拾いに山さ行ったけど。小僧あお札をもらって、あっちの山、こっちの山と歩いて栗拾っているうちに、とうとう日あ暮れてしまったけど。だんだん暗くなるし、小僧を困ったと思て、歩いているうちに、家あ一軒見っかったけど、小僧、喜んでその家さ行って

「暗くなって困った、泊めてけろ」と、言ったけど、そしたば

「あー、えー泊めるから中さひえれ」と言ったけど、小僧あ、少びとさあだっている人を見ると、白い髪はさばさとさせて、キバあ生えている大きだ口の山姥だけど。小僧あびっくりして

「おらあ、便所さ行きたえ」

「そんたら、どら、こうして行げ」と言って、小僧の腰さ、太い縄あゆっけたけど。小僧あ、便所小屋さ行って、縄をほどえで、便所小屋の柱さ、縄をしっかり結んでそごさ、お札を一枚はって置えでどんどと逃げたど。

しんばらくしてから山姥あ

「でだが、こんぞ」て、言ったけど。そすど、あれあ、「まー」たし」て言ったけど、またしんばらくしてから、

「出だが、こんぞ」て言ったば、お札あ

「まー」たし」て言ったけど、またしんばらくして、「出だが、こんぞ」

「まー」たし」て言ったけど、山姥あ、ごしえて、

「なんたらなかぴりだごとし」て、縄をぐっと、ひっぱると便所小屋あコロンと、きえったけど、
「ありやッ、小僧あ逃げだな――ッ」と言って、どしんどしんと大股で、追っかけながら、
「コンゾ――まで――コンゾ――まて――」と、叫んだけど。小僧あ、うしろを見ると、山姥あ大あごで、どしんどしんと来て、追いつかれそうだったど。そしたら小僧あ、またおれを一枚後に投げで、
「大きな野火あ出ろ――」て言ったけど。そうすると後が一面に大きな野火になったけど、山姥あ
「あッあッ、あ、あっ、コンゾ待で――ッ、あッあっ、あッあっ」と、言いながら、あっちさ行ったり、こっちさ来たりするうちに、小僧あ、どんどん逃げだけど。とだども、山姥あやっと、野火の焼けとごろを見っけて、野火をぬけ出し
「コンゾ――待で――」と、大股でどしんどしんで、追っかけて来たけど。小僧あ後を見ると、今にも追っつかれそうになったから、もう一枚のれを、
「大きな川になれ――」と言いながら投げると、後は、大きな川になって、水あ、ゴウゴウと流れたけど。山姥あ、あっちさ行って流されそうになったり、こっちさ行っておぼれそうになったりしたけど、その向に小僧あ寺さつで
「お和尚様、お和尚さん、戸あげでけろ、山姥に食れでしまう。お和尚さん、早く戸あげてけろ」て、戸、ドンドンとはたえだども、お和尚さんあ、ゆっくりして、
「あー今、開けるから、まってえろ」
「お和尚さん、早く、早く、戸開けてけろ、山姥あ来る」と言ったけど。やっと戸開けてもらって、中にひえると、お和尚様あ、はしばみ一つかみ持だしえで、
「梁さあかって、これでも食ってろ」て、言ったけど。小僧あ梁さあかって、梁の戸柳の中さひえって、はしばみ食ってらけど。山姥あ、やっと浅りどご見付けで、川をわたり、
「コンゾ――待で――」て、追っかけでお寺さ着で、「お和尚さん、和尚さん、小僧あきえって来たべ、どごさかくれたしこ、その皿を、鼻をくんくんさせながら、かりでいだけど。そして梁さあかるべとすたずぎ、小僧あ、はしばみパチッと割

ったど。

「あや、おっかにぇはしごだごど。ふっかれはしごだ。どごから梁さ上るのだ。」と、言いながらほかにはしごにぇがら、まだ上るべとしたすぎ、小僧あ、またはしぼみ、パチッと割って、中の実をむしゃむしゃと食ったけど。

「あや、おっかにぇふっかれ様ゎだ」と言うど、お和尚様あ、

「そったに梁さ上りだえなら、どりや、ありぇあまじにぇしてやる」と言って「たがずく、たがずく、たがずく」て、まじにぇかけると山姥の背あ、するするどのひで今にも梁さ届きそうになり、山姥は鼻をくんくんさせで嗅いでうけど、お和尚様びっくりして、今度あ、「ひぐずぐ、ひぐずぐ、ひぐずぐ、ひぐずぐ」と、まじにぇかけると、今度あ、見る見るうじに山姥の背あ低くなって、指ぐらいの大きさになり、どんどん小さくなって、おしまえにぇ、豆粒ぐらいになって、あてぎの上を、ピタピタとはしぇで居だけど。

お和尚様あ、ちょうど、たんかがら仏様にあげ餅ニッに割り、豆粒ぐらいになった山姥を、餅にべったりくっけで、ごっぺり飲んでしまったけど。

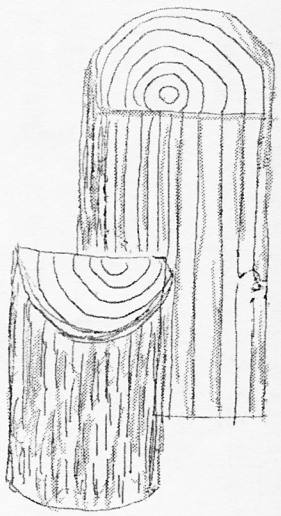
小僧あ、やっと安心して、戸棚から出はって、梁からおりだけど。

次の朝、お和尚様あ便所さ行って、うんこをしたら、うんこの中から、山姥出て来て、

「あや、おっかにぇお和尚様だごど」と言って、どしん、どしんと、大股で山の方さ逃げで行ったけど。とっぴんぱらりのぷん。

（8頁より）抑圧された自我がどうなるかについて説いているのです。人間関係の上下はどこにでも存在して、それがあるための秩序というものが〝場〟にはありますね。これが日本社会の特徴なそうですが。時にはハメをはずすという抜け道は用意されてあるけれども、上下ということを無くしては〝場〟は保つことは出来ない。そこには、上は上なりの気づかいと気がねがあり、下は下なりの苦しみや気がねがある。おたがいがおたがいの立場の犠牲になっている。なぜそうなるかといえば、日本の自我は「場の倫理」と平衡状態を保ちつつ維持されなければそこから浮いてしまうのです。

おたより



北上市更木町。駒込　法子

前略、今回の石川さんの猫恋記を拝読しますと、私は強く共感、ただし猫を犬と置き換えて、急に石川女史に親しみを覚えた次第です。この頃、しひれる様に犬を恋しくなることがありますが、犬の厚情にこたえる事は今の私には、身心共に難儀なので我慢しています。

アニミズムは時代によって乗り越えたりすることの出来ぬ夕チの物（てこで、人間と共に常にあるんじゃないですかね。私は、人間社会から出来るだけ身を離して、犬は居ぬとても、野鳥とか虫とか草とか木とかと共に暮していますが、ちっとも寂しくなくて、むしろ賑やかに多忙に彼等との生活に没頭しています。

それがアニミズムとか何とかお題目の如何は、もう私には関係ないことです。こうしてみると現役引退、老人生活という奴は仲々結構なもので、私は、子供時代の思いっきりの自由さというものを再び満喫しているんですよ。うらやましいでしょうって、

今年は私の所にも敬老会の招待が来たんです。来年だと思っていたんですがね。一体、敬老会というのは何時始まったのか、たしか私が子供の頃からありました。何もそんな六十年も前からのしきたりを現代に於てやる事ないじゃありませんか。

学校の体育館の板間にゴザ敷いて坐わらされ、村のえらい人達の下手くそな挨拶をきかされ、甘ったるい赤飯など食わされて、あまけに田舎のガガサマ達のネコシャコした手踊りなどみせられに、誰が出かけて行くものですか。考えてみるまでもない事です。

大体、役にたたぬくせに暇をもてあまして、生甲斐を人様に指図してもらわねばならぬ様な老人（シロウト）など敬老会に行くよりもさっさとくたばった方が

世のため人のためになるんだ等と、広言はいたら小原さんに叱られそう。小原さんはそういうシグレトショリの味方だから。

近頃あまり老人問題をマスコミが騒ぎ立てるので、私のヘソの曲り具合も急カーブになった様です。先日、タクシーの運転手が言いました。

「オヤジも今に寝たきり老人になると思えばそっとずる。」「ナニ大丈夫だ、カッチャンが診てくれるから」と慰めて「んでもな、今時のカッチャは中気たおりのオヤジなんぞおっぽり出して、さっさと盗癖きめ込むかもな。」「そたもや。」と、あとは笑いましたが、こんな髪の色も水々しい若者までが老人恐怖症になってますよ。（略）

。。　。。

「この頃、婆さん達の尊さを聞く事が多くて、いつの間にか、一生懸命その事を考えてかっぷつ言ったりしています。止め〳〵人の事だ、もっと面白い事を考えようと思っても、いつの間にかもとっている。つまり人の事ではないのですね。

隣のB婆さんがあまり家族の悪痴をこぼすので、「んだがら一人暮しに限る。」と言ったら、きっとなり、「手足動くうちはなさッ。」と言い返しました。　こっちも負けずに、やりかえす。

「手足動かなくなれば、子供などあってもなくても同じだ。仕事止めて親見てればロが干上る。そんたな考行息子今時あるこか。」

B婆さんは急に冷かめ顔になり、すこすこ帰って行きました。勝った方とてあまり後味のよいものではありません。

（つづく）

石巻市門脇・阿部てい子

いま、私は河合隼雄著『母性社会日本の病理』という本を読んでいます。その中に日本人の「場の倫理」というコトバが出て来るので、ふと「おなご」に書かれてある「橋を渡る日々」の次恥売りますの件を思い出して手紙を書いています。（略）日本人における「場の倫理」が、いかに私達の心理の奥深く根を張っているかについて河合隼雄という著者は書いているのですが――。要するに、私達がふだん家庭やら職場やらハテはとなり近所やらにおける〝場〟というものの〝和〟を気づかうあまり、いかに自我を殺しているか。（6頁へ）

根の乳供養

石川純子

年の暮れなので、今年も観音様をお風呂に入れて洗ってあげねばと、毎朝お茶を上げている丸っになるるがその役をした。さて洗い終ったら屋敷のせいか、「少しは観音様にセケンのことを見てもらいましょうしなどと言い出し二階のテラスに上って行った。

しばらくして下りて来たら「りんごの木たちが切られたの、一番つらいんだって」と、さっきのおどけ顔とは違って、まるで悲しそうな目をしている。

人間ばかりがこの地の住人だとも思っていなかったが、木もまたこの地の住人だと教えられた思いでハッとした。その続きでふと、日頃考えていた宮沢賢治の木や林に対する思いが私なりに視えて来た。

今更事新しいことでもないのだが、賢治にとっても木はこの地の住人だったのだ。そして、この住人は賢治の目には寒冷地や痩せ土であることなど吹っとばして「松の木やならの木がつんつんと光のそうに立っていました。」といっても凛々しく立派だ。賢治の作品を眺めてみると、この住人と心を交せることで、どれほどに心が自在にされているか、それが随所でわかるが、例えば次の詩などもそれを表わしているだろう。

林と思想

そらは　ごうい
むこうの露にぬれている
草のかたちのちいさな林があるだろう

あすこのところへ
わたしのかんがえが
すいぶんはやく流れて行って
みんな溶け込んでいるのだよ
ここいらはふきの花でいっぱいだ

一見易しそうで、それていてよくわからない詩なのだが、賢治が林と交感していること、そのことでどんなに心が自在になっているかがわかる。

木々が彼の心を解き放ち、奥深いところに潜む思想までもが、自然に引き出されると言っているのだ。「林と思想」などと私たちを面喰らわせるような大仰な題なのもそのためなのだろう。

ところで同じ住人であるところの人間は当時どんなふうだったのか。一方ではこの酷薄な土地に打ちひしがれ、また一方では押し寄せて来る近代文明に卑屈に身をすくませていた人々。賢治はその人々に「雲から光から風から新しい透明なエネルギー――を得て地球にとるべき形を暗示せよ」と言う。さっきの続きで言えば、これは木から得たことばではなかろうかと私などは思ってしまう。

賢治の木はいつも立派だし、木はまさに雲から光から風からエネルギー――を得て雄々しく育つものだからだ。だから単純にとれば、この地の人々よ、その木のように凛々しく伸びよと聞こえてくる。が、勿論それだけではない。賢治はこの地の貧しさをのりこえるにはその文明を摂取することでもあるのだが、一方では、その文明が生きとし生けるものへこの地の住人たちの共生を今よりもっと打ちこわすものであることを見抜いていたはずだ。だからこの地で産み出さねばならぬ思想は、それらいのちを創造し生かしめている宇宙から直接学ぶことしかないのだと言おうとしたのだろう。

あたかもこの地の木たちが雲から光から風からそのエネルギー――を得ているように。賢治は、木のイメージを借りて「雲から光から風から新たな透明なエネルギー――を」得よと言ったのだと私には思えてくる。

どうやら宮沢賢治の世界に入るには、「猫の門」ではお門違いのようだ。これからは、この木の門から少しずつ入っていってみようと思う。

22『次長恥』売ります（4）

橋を渡る日々

×月×日

わたし。元を正せば一昨年の五月二十日の話しをしている間に、また新しい年になってしまったなハン。

B氏。つまり、一九八〇年五月の話しだったよなあ……。

わたし。そうなのス。その年の三月の人事異動で、福山さんという人が、生活課の次長になったとたん、辞表を出したわけ。

B氏。生活課の次長に……？

わたし。いまは生活課（洗剤、ちり紙から家具、墓石まで扱う。）と資材課（農業肥料、飼料、農業資材を扱う。）が統合して、購買課になってるとも、その年までは別々だったのよなハン。

それに、わたしのところは、次長恥と言っても他の係長ほどにも次長がいて、係長はなし。どこ　るが、今年度からは、補佐、係長制になったともなハン。統合された購買課には、次長ガニ人いるわけス。福山さんは人一倍真面目で電気関係のサービス部門を受け持っていたんだども我慢に我慢を重ねていたんだと思う。

冷蔵庫が何台売れた、ビデオが何台売れたと、いつもいつも推進と実績が物をいう課だから……。

B氏。一億総セールスマンの時代か……。

わたし。そうよなハン。客の来るのを待ってるようじゃ、殿様商法だと批難されるけれども、どうしてこうも、人の購買欲をかきたてなきゃならねえべなハン。

農協も、もう昔ビロやら羽毛ふとんやら、全員がセールスマンなんだから。受験師だろうと農機具の技術屋だろうと。

B氏。昔ビロに羽毛ふとん……？

わたし。そう。背ビロ。礼服、紳士服、オンワード柾山よ。重次郎先生にも買ってもらったの。電話した時は、重次郎先生、うんと笑ってないハン。

B氏。あの北上詩の会の重次郎先生が……。うんだへなあ……。詩の会と背ビロ売りはあんまり結び付かねえがらなあ……。

わたし。「よい物を、より安く」のキャチフレーズはいいんだとも、それが嵩じてなりふりかまわずになるのよなハン。最後が実績評価となれば。共済（保険）の一斉夜間推進となれば、これも全職員。二人一組になって一週間以上、とにかく目標達成までやるの。本所の職員は、それぞれの出身支所に属してネ。その実績は、毎朝出される「おはよう」（会報）に載るし、支所は支所で班ごとの実績が貼り出されるし。農協職員になって、なにがいやといって、この共済推進ほどいやなものないと、皆こぼすわけ。その保有高が、世界一と言われても、少しもうれしくない。

B氏。立花隆によってあばかれた、「全共連事件」のその共済（55年3月、滝沢会長以下全共連理事が総退陣、『週刊朝日』連載）のことか。世界一とは……。

わたし。そうよ。農協も金融部門にウエートがかかり過ぎて、この共済事業もその一つなのよ。毎年目標達成にあの手、この手。専門の推進員制度を設けて共済推進員を二年間やった者は、皆次長にするという約束まであって、五十五年まで、三十三人だった次長が、五十六年には三十九人になったんだから、次長職の乱発よ。もう……。

B氏。共済推進の話しも、次長職売りますと、関係ありとは、またまだ話しは込み入ってくるなあ。

わたし。農協さ来ても「共済」、家さ行っても「忍者」って、男の人たちはこぼしてる。（笑）

B氏。そんなにこぼすなら、やめればいい。といっても、いやな「仕事」もそう簡単にやめられないと同じかな……。

（つづく）